

平成26年度「不登校に関する研修会」 講義記録

第1回：平成26年7月22日（火） 県立但馬やまびこの郷

第3回：平成26年9月 2日（火） 県立教育研修所

テーマ「あたたかな居場所と絆がある学級づくり～学級の生活集団機能と人間関係～」

講師：中村 豊 先生（関西学院大学教授）

1 不登校の現状調査から

(1) 不登校児童生徒数の推移

(2) 不登校に関する実態調査

（平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書 平成26年7月9日 文部科学省）

・主な継続理由や受けていた支援について調査を行い分析した結果、以下の四点について傾向が明らかになった。

ア 不登校は「無気力型」「遊び・非行型」「人間関係型」「複合型」「その他型」の5つに類型化することができる。

イ 一旦欠席状態が長期化すると、その回復が困難である傾向が示される。

ウ 休み始めた時期と長期化した時期との間にタイムラグが生じていることから、一定の潜在期間を経て不登校になることが推測される。

エ 不登校のきっかけと継続理由、中学校3年時に欲しかった支援と現在必要とする支援との関連性は、非常に強い。

2 子どもの社会性について

「社会的絆理論」(1995)Hirschi,Travis から、人と人、人と集団、集団と集団を結びつける「社会的紐帯」(ソーシャルバンド)を強めることが不登校にも大変有効であることがわかる。

ソーシャルバンドの要素

①アタッチメント…信頼できる人間関係、多様な人間関係を通じた自己理解

②コミットメント…集団における役割理解と活動を通じた成就感

③インボルブメント…学習活動への巻き込み。種々活動による居場所づくり

④ピリーフ…基本的生活・学習習慣の形成。規律ある学校生活。

3 学校に求められる不登校支援の基本

①より良い人間関係

②自分のことを大切にできる

③学校生活が充実している

学校は、家庭と社会の中間地点であり、セカンドチャンスとしての場である。

上記三つの要素を満たすために、生徒指導の果たす役割は大きい。生徒指導には、(1) 課題解決的な指導(対症療法・治療的)、(2) 積極的な指導(予防・発進促進＝開発的)の二つがある。

(1) 課題解決的な指導(対症療法・治療的)

カウンセリングに対する期待は大きいが、人間性や哲学を基盤として、専門性や諸理論などの知識体系をしっかりと身につけ習得した技法を活用する必要がある。また、カウンセリングのみでは対応しきれない問題も多い。

(2) 積極的な指導(予防・発進促進＝開発的)

これからの生徒指導においては、一人一人の児童生徒にとって「わかる授業」の成立や、一人一人の児童生徒を活かした意欲的な学習の成立に向けた創意工夫ある学習指導が、一層必要性を増している。

個別指導…育てる教育相談、集団指導…各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などにおいて活用できる話し合い活動などがあげられる。

授業と生徒指導の三機能とは、

- ①自己存在感を与える
- ②共感的な人間関係を育成する
- ③自己決定の場を与え、自己の可能性の開発を援助する

具体的には…一人一人の児童生徒のよさや興味関心を活かした指導

児童生徒が互いの考えを交流し、互いのよさに学び合う場を工夫した指導

一人一人の児童生徒が主体的に学ぶことができるよう課題の設定や学び方について自ら選択する場を工夫した指導

4 早期対応の必要性

子どもの人と関わる力として次の三つを育てる必要がある。

①コミュニケーション力の育成

自分の本音を言語化させて、適切な自己表現ができるようにする。

②一人でいられる力

一人でいることを認められる視点。

③自分を大切に思う心

以上の力をつけるためにも、大人として子どもの健やかな成長を保障する責務があり、一人で悩まないこと、相談する力を身につけさせること、学校以外の力(社会的資源)を活用することを教えなければならない。

家庭や学校に、楽しいことがある、居場所がある、活躍の場がある、役割があることが大切。そのためには、日常生活の積み重ねを大切にすべきである。